

石神遺跡の調査

石神遺跡第18次調査現地説明会資料

独立行政法人奈良文化財研究所
飛鳥藤原宮跡発掘調査部

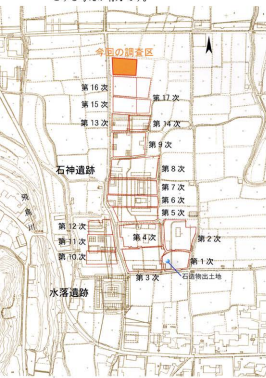




調査区全景（上層）

石神遺跡とは

石神遺跡は飛鳥寺の北西に位置します。1902年に噴水施設の一部と考えられる須弥山石、石人像が掘り出されました。『日本書紀』には飛鳥寺の西、あるいは甘樫丘の東の川上に須弥山を作り、都貨羅、多彌嶋、牟人、蝦夷、肅慎と呼ばれた律令国家周辺の人々を迎えて饗宴をしたとあり、石神遺跡をこの饗宴施設、現代風に言えば迎賓館としての役割を持つ施設とする考えが有力です。



調査区位置図



石神遺跡・水落遺跡復元模型（南西から）

石神遺跡の調査

石神遺跡の調査は、1981年から続いています。多数の掘立柱建物、石組の池や溝、石敷などが確認され、これらは大きくA期（7世紀前半～中葉）、B期（7世紀後半～天武朝期）、C期（7世紀末～8世紀初：藤原京期）に区分できます。饗宴施設と考えられるのはA期にあたります。以後、建物の配置が変化していくことから、施設の性格も異なっていくと考えられます。

遺跡の中心施設は南北約180mの範囲で、南を飛鳥寺に隣接する東西堀（1・3・10次調査）、北を東西方向の石組溝と堀（13・14次調査）で区画しています。遺跡の北には古代の幹線道路である阿倍山田道が東西方向に通ると想定されています。

今回の調査

今回は石神遺跡北側の状況、および阿倍山田道の確認を目的に第16次調査の北方に調査区を設定しました。南の第15・16次調査では3本の南北溝が調査され、木簡等の多量の遺物が出土しました。

調査区周辺は7世紀以前には沼地でした。この沼地はA期に整地されたことが明らかになっています。

過去の調査でも確認されている南北溝2～4は調査区を南北に縦断しており、出土遺物の年代からB～C期に機能したことがわかります。また3本の溝に先行する溝構として、南北溝2の下層に南北溝1があります。この溝には岸の一部に石組や杭列といった護岸施設が残っていました。B期に機能したと考えます。

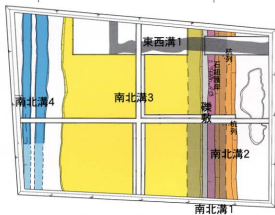
これらの南北溝を埋め戻した後に、礫敷および礫を詰めた東西溝1がつくられます。

想定されている阿倍山田道については、今回の調査においても確認できませんでした。

Y-16,690

Y-16,670

Y-16,650



X-168,280

今回の調査区(第18次)

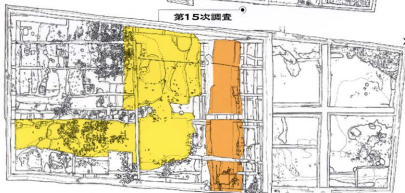
第16次調査

第17次調査



X-168,300

第15次調査



X-168,320

遺構平面図 (S=1/300)

出土土器・鏝



出土土器



出土遺物

木簡、封緘木簡、銅製・木製人形、斎串、舟形・鳥形木製品、鏡、横櫛、下駄、漆器、琴柱、土器、墨書土器、瓦などが出土しました。

木簡のうち、「観世音経」と書かれた木簡には「己卯年八月十七日」と年月日が記されています。己卯年は679年(天武8年)にあたります。日本列島内における観世音経の存在を記載した史料の中では、今のところ年代が明示されている最も古い例となります。観世音経が観世音菩薩信仰の基本的な経典であることを考えると、アジア各地に広まった観音信仰が日本にどのように入力されたのかを考えるための貴重な史料になります。

また、祭祀具、建築工具、生活用具、楽器といった多種多様な道具の出土によって、飛鳥の人々の彩りある生活をうかがい知ることができます。中でも銅製や木製の人形、斎串、舟形・鳥形木製品は、天武朝以後活発におこなわれる祓などの祭祀行為にともなう道具とみられ、この頃の祭祀の形成と発展を考える際の貴重な資料になります。

【観世音経】木簡



・ 観世音経十卷記白也

・ 己卯年八月十七日白奉経

まとめ

南北溝は更に北へ続くことが明らかとなりました。また、多種多様な遺物が出土しました。特に「観世音経」木簡や銅製人形などの祭祀具には、宗教的な知識や行為の一端が認められます。これらの遺物がどこからどのようにもたらされ、ここに埋まるに至ったのかという点については、周辺の状況をも更に分かる必要があり、阿倍山田道の確認を含め調査を進めていきたいと考えています。(2006年3月)

石神遺跡第18次調査現地説明会資料
(飛鳥藤原第140次調査)

独立行政法人奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
〒634-0025 奈良県橿原市本之本町194-1